
Ringwanderung

竜胆

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

R i n g w a n d e r u n g

【Nコード】

N 3 8 4 5 L

【作者名】

竜胆

【あらすじ】

大学に通うアラン・バドリオは、魔法使い養成学科・「呪学科」に通う少年で、何故か関西弁の不良（本人否定）。

ある日、調査のために学校を訪れた大魔術師と廊下ですれ違い、目をかけられ（つけられ）、どういうわけか旅に出ることに（強制）。

魔術よりも拳で語る（？）不良少年の、わりとぐだぐだなハイ・フアンタジー（多分）。

prologue

【Ringwanderung】

吹雪や濃霧のために方向を見失い、同じ場所を歩き続けること。

プロローグ

自分はけっこう真面目なほうだ、とアランは思っている。

授業には毎回出席しているし、期限は守らないが、宿題だって提出している。

一人で廊下を歩いていると、数人のグループとすれ違いざまに目が合った。

その瞬間、全員の口からひっと息をのむ音が漏れた。

夏の暑さに辟易して、いつもより少し険しい顔をしていたことは認めるが、いくらなんでも失礼ではないか。

なんやねん、とひとりごち、教材で汗ばんだ首筋をあおぎながら、アランは屋上のほうへと歩いていった。

学校の中で、アランが一番気に入っているのがこの屋上だった。

と同時に、柄の悪い少年たちのたまり場でもあった。

アランが屋上のドアを押したとき、そこにはすでに先客が四、五人いて、いわゆるヤンキー座りをしていた。

どの生徒も、札付きのワルとして学校中に顔が知れ渡っている。

タバコは吸っていないが、地毛でピアスをしていないのは、この場ではアランだけだった。

風がアランの黒髪を撫ぜていく。

やっぱり、ここは気持ちが落ち着いていい。

アランが近づいていくと、少年たちはいっせいにアランを見た。

「呼び出し、どうだった？」

不良たちのナンバーズリーであるカークが、じろりとアランを睨みつけながら言った。

威嚇しているわけではなく、無意識にやっているのだから性質が悪い。

「特別課題を出された」

「なにしたんだよ」

アランが答えると、ピンク色の髪の少年　ジルベルトがニヤニヤしながら聞いてきた。

習いもしない魔法で無理に染めたせいかな、光の加減でオレンジや紫にも見えたりする。

「風を起こしてみろって言うから、その通りにやっただけや。呪学の授業中に、やれって言われたことをやって、なにが悪いねん」

アランは腹いせに教材を丸めて、ぐしゃぐしゃにしようか　と思っただけでやめておいた。

テストが近いからだ。

「それだけじゃ、説明不足だな。こいつ、教授のカツラをわざと吹き飛ばしたんだ」

カークが付け加えた。

「あのおっさん、やっぱりツラだったか」

「例えばやけど、俺がリカルド・ダヴィアやったら、教授はどうしたと思う？」

アランは学年一の優等生の名前を出した。

「次からは気をつけなさい、だろうな」

カークは肩をすくめてみせた。

「差別や。なんで俺やったら課題やねん」

「そりゃあ、お前が不良だからだろ」

カークはあつさりと答えたが、アランにとっては心外な回答だった。

「俺がいつ、不良やって言った？
こんな真面目な不良いるか」

「確かにお前は、不良にしては勉強するが、喧嘩するだろ」

「俺は喧嘩を売ったことはない」

「必ず買っじゃねえか」

「正当防衛や」

いつものやり取りを交わしていると、ドアが開いて、アランの知らない生徒がおそろおそろ顔をのぞかせた。

「うん？　なんか用か」

アランが愛想よく声をかけると、少年は少し安堵したようだったが、早くこの場を去りたいというのが顔に出ていた。

カークが舌打ちすると、少年は肩を震わせた。

「あの、先生が呼んでるよ」

ジルベルトが口笛を吹いた。

「教授にモテるな、アラン」

「覚えがない」

アランは髪をかきながら思案した。

「そうや、どこに行けばいいん？」

「校長室だって」

「おい、お前」

ニーノが凄みのある声で少年に呼びかけた。

「敬語を使え。アランさんにそんな口をきくな」

「いらんことを言つな。ああ、気にせんでええよ」

アランは固まっている少年の背中を押して、一緒に階段を下りた。

不良と大魔法使い

ロワイエ・デュヴァルは黒いローブの裾を靡かせながら、大学の廊下を颯爽と歩いていた。

多忙のため、母校に立ち寄ることはほとんどないが、今日は特別な用があつてここに来ている。

普段から近寄りがたい雰囲気振りまいているデュヴァルだが、あまりの暑さに、目つきの鋭さが増していた。

少年時代に不良をやっていたせいか、なにもしなくても凄みがある。

夏だというのに全身黒づくめというのも、いつそう禍々しく見えた。

骨のある生徒はいないかと観察していたが、デュヴァルは二十人目で諦めてしまった。

目を合わせるところか、小さく息を呑む始末だ。

今日は無駄骨かと思っている時、向こうの角から一人の少年がやってきた。

黒髪で、教材を持っているところを見ると、まっとうな生徒のようだが、遠くからでも威圧的な気配を感じることができた。

すれ違う生徒も、目を合わせないようにしている。

少年の目の前で立ち止まり、じっと見下ろすと、射殺されそうな

ほど鋭い眼が返ってきた。

ほとんど条件反射のような素早さだった。

「邪魔や」

デュヴァルは興味を覚え、大人しく道を譲った。

十六歳ぐらいだろうが、かなり背が高い。

デュヴァルも高いほうだが、三十代のデュヴァルと並んでも、二三センチしか変わらないのではないかと思う。

デュヴァルは去っていく背中を品定めするように観察した。

服の上からではわかりにくいが、かなり鍛えているようだ。

魔力も申し分ない。

それに、あの覇気。

精神の強さと魔力は密接につながっている。

デュヴァルは少年の顔を頭に焼き付け、再び歩き出した。

「お待ちしております、デュヴァル様」

校長室の扉を叩くと、数秒もしないうちに校長が現れた。

「どうぞ、お座りください。
今日は暑いですね」

返事の代わりにちらりと視線を送るが、それをどう勘違いしたのか、校長の顔色が悪くなった。

デュヴァルは舌打ちしたいのを抑えて、ソファに腰を下ろした。

「ここの生徒の名簿を見せてくれ」

「誰か、気になるのがいましたかな？」

校長が、今度はそわそわしながら言った。

「勧めたい生徒がいるのか」

「ええ、この生徒なんですけど　リカルドといって、学年一の秀才です」

デュヴァルは写真を一目見ただけで、校長に書類を突き返した。

「どうでしょうか」

「駄目だな。覇気が足りん」

デュヴァルは他に選ぶ気はなかった。

さつきすれ違ったあの少年、あれは見所がある。

「こいつを借りていこう」

ようやく見つけた書類を校長に見せると、今度こそ真っ青になった。

「いけませんよ、これは。」

大学一の問題児です。

不良グループのトップで、喧嘩は必ず買うと豪語しているほどです」

「売らないのか」

「売りはしませんが」

「ふん、愚かなことはしないか」

「それと、自分が不良だとは思っていません。

授業にも必ず出席していますが、よくわかりませんよ」

「面白いな」

デュヴァルは純粹にそう言った。

「こいつをここに呼んでくれ」

校長は反論しかけたが、デュヴァルの顔に浮かんだ猛禽類のような笑みを見て、慌てて部屋を飛び出した。

不運な不良

校長室へ向かうすがら、アランは自分が一体なにをやらかしたのかと記憶をたどった。

自分に呪いをかけてこようとした上級生を拳で沈めたこともあったが、それは二日前の話であって、もう時効のはずだ。

それに、正当防衛でもある。

わからんなあ、と呟いて、アランは考えるのをやめた。

校長室はすぐそこだ。

「入るで」

一応の礼儀として扉をノックし、返事を待たずに部屋へ入った。

すると、顔色の悪い校長と、妙に凄みのある男が向き合っていた。ソファに座っていた。

「来たか」

男がにやりと笑った。

その瞬間、背筋に冷たいものが走った。

こいつは視線だけで人を殺せるぞ、と直感で思った。

魔術師の中に、「邪眼」といって、見るだけで人を石化させたり殺したりする特殊能力を持った者がいるが、その類ともまた違う。

先ほどすれ違った時は気付かなかったが、男の持つ雰囲気はアランの頭に危険信号をひびかせた。

「お前、名前はなんという？」

おっさん、自分から名乗りいや　という勇氣は、湧いてこなかった。

不良の性だろうか、自分より実力が上だとわかると、不思議と反抗する気にならない。

「俺はアラン・バドリオ。
さきに言っておくけど、不良ちゃうよ」

「いや、不良だな。見ればわかる」

「なんで？」

「俺も昔は不良だった」

なるほど、とアランは妙に納得した。

「今はマフィアでもやってるん？」

校長が小さく悲鳴をあげた。

対照的に、男はなぜか楽しそうだった。

「そう見えるか？」

「視線だけで人を殺せそうな眼をしてるから、そうかなと思ってんだけど」

「俺が怖くないのか」

「ああ、恐いの好きやねん。
スリルがあつてええやろ。」

それより、あんたは誰やねん。
そろそろ名乗ったら？」

ますます恐い笑みが広がったのを見て、アランは嫌な予感がした。

ついでにいうと、不良の勘はよく当たる。

「ロワイエ・デュヴァル。
名前くらいは聞いたことがあるだろう」

さすがのアランも、そこまでは予測できなかった。

ロワイエ・デュヴァルとは、今いる魔術師の中で最も力のある男の名前だ。

三十五歳という若さで、トップにまで上り詰めた、ほとんど伝説の人物で、アランは自分の非礼な言動の数々を思い出して、居心地の悪い思いをした。

「偉そうな口たたいて悪かったと思ってるけど、謝れへんよ。」

知らんかったんやから、仕方ないし」

「やはり面白いな、ガキ。

不良のナンバーワンだというから、もっと荒れているのかと思ったが。

これならいいだろう」

「なんの話か、説明はないん」

「お前、俺と一緒に来い。

休学届はもう出してある。

魔術師ギルドにも遍歴学生としての許可証を申請しておこう。
質問はあるか」

「どこからツツコミを入れていいか、わからんな」

「そうか。飲み込みが早くて助かる。

では、行くぞ」

「あんたの耳、自動変換機でもついてるん？

いきなり言われて、行くわけないやろ」

「では、歩きながら説明してやろう」

「そうして」

固まっている校長を置いて、アランとデュヴァルは部屋を出ていった。

不良と少女

「俺はある犯罪者を追っている。

そいつの名はローランド・ヴァローネ。

魔術を使って非合法に稼いでいる、マフィアの首領だ。

俺の目的は、そいつと、その配下、傘下の組織を潰すことだ。

何か質問はあるか？」

鋭い目で一瞥されると、アランは目に見えない重圧を感じた。

それに、場所も悪かった。

女性つけしそうな喫茶店で、柄の悪そうな二人組の男が顔をつきあわせているため、周囲からの視線にも耐えなければならぬのだ。

だが、この場所を選んだ本人は、全く気にしていないようだった。

大魔術師になるには、肝も据わっていないなければならないということだろうか。

「あんたの目的はわかった。

でも、なんで俺なん？」

卒業もしていないひよっこなんか、お荷物にしかならんと思うけど？」

「知識など後から叩きこんでやる。

俺はスパルタだからな、覚悟しておけ」

「ちょっと待ってや。

一緒に行くなんて一言も言ってへんやろ」

「俺についてきたということは、了承したということだろう」

「ちやうよ。」

話を聞くだけ聞いたろって思っただけで」

「ここまで聞いたんだ。
後には退けんぞ」

アランはオレンジジュースの最後の一口を飲んだあと、ため息をついた。

「あんたのほうが、よっぽどマフィアに向いてるで」

アランの返答をどう受け止めたのか、デュヴァルは満足げに頷き、伝票を持って立ち上がった。

「行くぞ」

「ほんまに本気なん？」

アランは念のため確認をとった。

デュヴァルが、実は暇つぶしにからかったただけだと言い出すのを期待したのだが、そんなことにはならなかった。

「当たり前だ。」

奢ってやるんだから、働いて返せ」

「そんなこと言っんやったら自分で払う。
あんたの分も払うから、休学届は返せ！」

アランは伝票を奪おうと手を伸ばしたが、デュヴァルはあっさりとかわして、伝票を持って行ってしまった。

「ほら、行くぞ」

デュヴァルに引きずられるようにして、アランは喫茶店を出た。

もうどうにでもなれという心境だった。

この世界には不思議な人種がいるということを、アランは知っていた。

傍若無人で自分勝手なのに、なぜか必ず自分の思う通りに事を運んでしまう人間だ。

ロワイエ・デュヴァルは間違いなくそういった人種だろう。

それに、アランは旅というものに少なからず憧れを抱いていた。

面倒なことは嫌だと思っ反面、本能が暴れられる場所を求めているのも、その狂暴な衝動が簡単には消えないこともわかっていた。

だから、多少の不満はあるが、このまま流されてみるのもいいかもしれない、と思っただのだ。

喫茶店を出たとたん、アランは息を呑んだ。

いまだにアランの腕をつかんでいたデュヴァルの首に、ナイフが突きつけられていたからだ。

デュヴァルの背中から顔を覗かせると、ほっそりとした白い腕が見えた。

ナイフを持っているのは、セミロングの華奢な少女だった。

アランは思わず目を覆った。

デュヴァルは不快そうに目を細めた。

「なんだ、この小娘は」

「うちのリーダーから離れてよ」

ナディア・カロツソは勝気そうな目に殺気を漲らせて、自分より二十センチ以上背の高い男を、真っ向から睨みつけた。

ナディアは不良のナンバーツーで、その好戦的な性格は学校の誰をも凌ぐ勢いだ。

誰にでも牙をむく狂犬だが、アランにだけはよく懐いている。

「ナディア、ナイフを仕舞え。」

そんな物騒なもの、簡単に出したらあかん」

「リーダー、この人誰？」

デュヴァルはじろじろとナディアを観察し、ナディアはそれを「

メンチを切られた」と思ったのか、同じようににらみ返した。

「こいつはしばらく大学を休む。

今から別れの挨拶でもしておくんだな」

「なんで？ 私にはそんなこと一言も……」

「今決まったんや。悪いけど、他の奴らにも伝えておいてくれ」

「どこに行くの？ 私もついてくよ」

ナディアは捨てられた子犬のような目でアランの腕をつかんだ。

そうされると弱いということを、知っていてやっているのだろうか。

「トップがおらんのに、お前までおらんようになったらどうなる？」

「嫌だ。絶対についていくから」

アランに言っても仕方がないとわかったのか、ナディアは方向を変えて、デュヴァルを挑戦的に見据えた。

「いいでしょう？」

「ああ、構わん」

「ほら、いいって言ってるじゃない」

アランは状況についていくのが精いっぱいだった。

「いいんか？」

アランはその返答が信じられなくて、恐る恐る尋ねた。

「喧嘩早いガキは好きだ。

昔、俺の手下にこういう奴がいたんだが……懐かしいな」

ナディアは素早く反応して、噛みつくように言った。

「勘違いしないで。

私はアランにしか従わない」

「不良というのは、今も昔も変わらん」

全く会話が成り立っていないということに、二人とも気づいていないようだ。

アランはこっそりため息をついた。

これから先、自分が気疲れするのは目に見えている。

不良、旅立つ

デュヴァルの行動は素早かった。

あつという間に魔術師ギルドのお偉いさんから二人分の「遍歴学生」許可証をもぎとり、アランと初めて会った三日後には全ての準備が整っていた。

ちなみに、「遍歴学生」の証明書は、そう簡単に発行される代物ではない。

試験を受けて優秀な学力を認められた生徒にのみ発行され、特別な濃紺のローブと、「遍歴学生」の目印となるバッジを渡される。

遍歴学生には様々な特典がついており、そのうちの 하나가、どの交通機関 列車や馬車、船など でも無料で使うことができる、というものだ。

朝早くから、アランは二人の連れと一緒に列車が来るのを待っていた。

遠目から見ればなんということもない三人組だが、そこだけ異様な空気が流れていた。

デュヴァルはなにもしなくても威圧的なオーラを振りまいており、半径一メートル以内に人を寄せ付けない特訓でもしていたのだろうかと思議になる。

ナディアは意識的に恐い目をして、無差別に威嚇する態度を見せて

いた。

やっぱり俺が一番常識的やんな、と思っていると、デュヴァルとナディアがそろってこちらを見ていた。

「どうしたんだ？」

デュヴァルが口を開いた。

この男の口からこんな台詞が出るとは思わず、アランは一瞬返事に詰まった。

「すごい気迫だね。誰か殴りたい相手でもいたの？」

アランはナディアを見つめ返した。

「俺は、そんなに物騒な顔をしてたんか？」

「物騒もなにも……リーダー自体、物騒の代名詞じゃない」

アランがショックを受けている間に列車が到着し、自分の発言がどんな効果をもたらしたかなどまるで気にしないで、デュヴァルとナディアはさつさと乗車してしまった。

アランは流れていく風景をぼんやりと見つめながら、これからのことではなく、今までのことを思い返していた。

自分としてはいつでも愛想よく、を心がけていたつもりだったのだ

が、周りによるとそうではなかったらしい。

目つきだろうか。

ふと本を読んでいたデュヴァルと目があつたので、アランは試しににっこりとほほ笑んでみた。

デュヴァルは表情を変えないまま、

「禍々しいな」

そう言つて、再び書物に目を戻した。

禍々しさを一身に纏つたような男にこう言わせるほどのだから、相当なのだろう。

「もうええ。

あんたに聞いた俺がアホやったわ」

アランはため息をつき、自分の膝に頭を乗せて眠っているナディアの髪を手ですいた。

すると、ナディアが目を覚ましてしまった。

「リーダー……」

「ああ、悪い。起こしたな」

ナディアは眠たそうに目をこすった。

どうやら寝ぼけているようだ。

「リーダー。」

私、リーダーが好きだよ……。

こんなに、人を射殺せそうな目をできる人、リーダーしか知らないから……」

一部の単語を覗けば、ある意味立派な告白だ。

中身は狂犬だろうが、かわいい女の子にこう言われれば、悪い気はしない。

アランは照れ隠しに自分の髪の毛をかきむしった。

「俺がお前を旅の連れに選んだ理由、教えてやろうか」

デュヴァルを見ると、こちらは前科持ちの犯罪者のような物騒な笑みを浮かべていた。

「聞いてほしいんやったら、聞くけど……」

「お前なら、いい弟子になると思ったんだ」

「俺はいつの間に、あんたに弟子入りしたんやろうな……」

「いいから、黙って聞け。」

お前は俺と目が合っても怯えないだろう。
いちいち怯えるようなのがそばにいたら、鬱陶しくてたまらん。
その点、お前は楽だ」

デュヴァルの声に自嘲めいたものを感じ取り、アランはわざとふざけた態度で肩をすくめた。

「それって、俺やったら和むってことやんな」

少し調子に乗って言ってみると、デュヴァルは小さく笑った。

「そうかもしれんな」

アランは言葉を失った。

人を拒絶する硬い壁を張り巡らしているかと思えば 突然こんな面を見せるのは、反則だ。

アランは気のきいた返しを必死に考えたが、思い浮かばなかった。

そして、言葉はいらないのだと気づき、むず痒さを抱えたまま、窓のほうに顔を背けた。

しばらくして、アランはぽつりと呟いた。

「この旅、面白くなりそうやな……」

デュヴァルは本に目を落としたまま、黙ってその言葉を受け止めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3845/>

Ringwanderung

2010年10月12日05時35分発行